

## 勉強の仕方

2022.10.24

「勉強しようという気持ちがわからない」という子どもが増えた、という調査結果がある。東京大学とベネッセとで実施している「子どもの生活と学びに関する親子調査2021」である。勉強意欲がわからないと答えた子どもの割合が、小学生（4～6年生）、中学生、高校生いずれも2015年の調査開始以来最も高く、高校生では6割を超えた。

ここでは、勉強方法がわかるかどうかとの関連が指摘されている。「上手な勉強の仕方がわからない」という子どもは、小学生で50%、中学生が65%、高校生が68%である。一方、「勉強しようという気持ちがわからない」が、小学生で43%、中学生が59%、高校生は61%である。学校段階が進むにつれて上がる傾向にある。

また、「授業が楽しい」は、小学生で75%、中学生で68%である。「先生は理解できていないところをわかるまで教えてくれる」は小学生が71%、中学生が63%、高校生が60%である。

これらのデータから、勉強意欲がわからない主な原因として考えられるのは、やはり勉強方法がわからないということではないのか。やろうとしても、何をどうやったらわからないというのは辛いだろう。そのうち、勉強意欲が減退しても仕方がない。

では、学校では、どのくらい勉強方法を教えているのだろうか。「勉強をなさい」では、何も解決しない。よく「家庭学習の手引き」なるものがあり、そこには教科ごとの勉強方法が載っていたりする。だが、多くの場合は、方法が一通りである。この勉強方法に合う子どもはいいが、学級のすべての子どもに合うとは思えない。

以前、国語の授業を担当していたときのことである。勉強方法を3パターン提示していた。テスト勉強の方法では、何をどのようにやればよいのかを具体的に示した。普段の学習でも、3パターンを示した。実際にやってみて、自分に合った第4の方法を見つけるのもよい。

最近の学校の授業では、どこまで子どもたちに勉強方法を教えているのだろうか。「予習をなさい」「復習をなさい」というレベルではがちが明かない。にもかかわらず、このレベルで終わってはいないだろうか。学校の先生になるような人は、きっと予習も復習も自分でできた人であろう。だから、予習や復習の仕方がわからない子どもの気持ちはわからないかもしれない。

もしかしたら、「家で勉強をなさい」というレベルで止まってはいないだろうか。自分の力で勉強を進められるような子どもはいい。問題は、一人では勉強できない子どもたちである。何となく教科書を眺めている子どもや、国語であれば、とりあえず漢字の練習をしている子どもははいないだろうか。どうも、上記の調査結果からは、そういった子どもの姿が思い浮かんでくる。

野田中学校の生徒たちを見ていると、勉強意欲がわからない生徒が6割いるとは思えない。しかし、自分なりの勉強方法がわかっている生徒はどのくらいいるだろう。やる気はあっても、何をやらいいのかわからないのでは、さぞや辛いだろう。

「上手な勉強方法がわかるようになった」子どもは、勉強意欲も向上しているというデータもある。勉強方法は、授業改善とともに学力向上のカギである。